

◆ K君のこと ◆

ここしばらくの間は感染状況が落ち着いており、各部活動は新人大会のシーズンを迎えている。時間の許す限りいくつかの会場を見て回っている。

このように過ごしている中、昼休みに電話が鳴った。

「校長先生、お久しぶりです。・・・大学のKです。」

最初は誰だかわからなかった。しかしながら、そうこうしているうち、「あー、彼だ」と合点した。

4年前、前々任校でのことである。ハンドボール少年男子茨城県代表として、「第72回国民体育大会 愛顔（えがお）つなぐえひめ国体」に出場した藤代紫水高校は、愛知県選抜チームとの1回戦に勝利し、続いて福井県代表・北陸高校との準々決勝に臨んだ。奇しくも、その前3月に行われた全国高校選抜大会では26－36で敗れた相手である。前半は最大6点差をつけられたが、後半は一時逆転するなど、選手たちは最後まで諦めることなく全力で戦った。結果は26－27の僅差で敗れはしたが、最後の得点は残り1分になってからのものであった。

さて、その試合が終了ししばらくたった後、引き上げてくる生徒たちを出迎えた。悔しさにまみれた顔があるなかで、私の印象に残ったのが、電話の相手、キャプテンK君のものであった。激しい闘志むき出しの試合中の表情とは一転したアルカイク・スマイルとでも表現できそうな微笑。この印象をもとに、以前ある冊子に「K君の微笑」とのタイトルで拙稿を書かせてもらったことがあった。非常に満ち足りた何かを感じさせるその表情と電話の相手がシンクロした。

直前に行われたインカレの報告と彼自身の進路についての話の後、暫し4年前のことを懐かしんだ。その学校で過ごした期間はたった1年間であったけれど、何ものにも代えがたい1年間であった。そして離任式の時に涙をこぼしたことを思い出した。



4年後に再び大きなギフトをもらった。K君の柔和な微笑を思いだし、彼の未来に幸あれと祈った。